

天に宝を蓄えよ

マタイの福音書 6 章 19-24 節

はじめに

今日の聖書箇所 19-21 節でイエス様はこう言っています。「**自分のために、地上に宝を蓄えるのはやめなさい。そこでは虫やさびで傷物になり、盗人が壁に穴を開けて盗みます。自分のために、天に宝を蓄えなさい。そこでは虫やさびで傷物になることはなく、盗人が壁に穴を開けて盗むこともありません。あなたの宝のあるところ、そこにあなたの心もあるのです**」。イエス様はここで、自分の宝を地上に蓄えるのではなく、天に蓄えなさいと言われます。なぜなら、宝を地上に蓄えると、傷物になったり盗まれたりするからです。宝を天に蓄えれば、傷物になったり盗まれたりするともないので、天に宝を蓄えなさいと言われます。

皆さんにとって、宝物は何でしょうか。皆さんが大切にしているもの、絶対に失いたくないもの、それが皆さんにとっての宝物でしょう。ある人にとっては、高価な物かもしれません。家や車や洋服などかもしれません。またある人にとっては、自分の功績かもしれません。自分が努力して手に入れた地位や名誉や評判かもしれません。またある人にとっては、家族かもしれません。特に親にとって子どもは宝物かもしれません。その他、それぞれが大切にしているもの、失いたくない宝物は様々なものがあるでしょう。

しかしイエス様は、それらの宝物を地上に蓄えるのはやめなさいと言われます。なぜなら、地上では傷がついたり、盗まれたりするからです。イエス様は、自分の宝物は天に蓄えるべきだと言われます。天では傷がついたり、盗まれたりするところがないからです。天は、神様がおられ、イエス様がおられる所です。ですから、私たちの宝物を天に蓄えるということは、私たちの宝物を神様にお任せするということではないでしょうか。宝物を地上に蓄えるということは、私たちの宝物を自分で守ろうとすることのように思います。しかし私たちの宝物を自分で守ろうとすると、傷がつき、盗まれてしまうのです。しかし私たちの宝物を神様にお任せして、神様に守ってもらおうと、傷がつくことも、盗まれてしまうこともないのだということではないでしょうか。

私たちは、自分の宝物を自分の手に握りしめていると、あまりにも大切に思うばかりに握りつぶしてしまうことがあるかもしれません。自分の宝物は、自分で握りしめてしまうのではなく、神様の御手に委ねることが何よりも安全なのではないでしょうか。大切に思うものほど、失いたくないものほど、自分で握りしめるのではなく、神様の御手にゆだねていくべきことを、イエス様は教えようとしているのではないのでしょうか。

1. 天に宝を蓄えよ

さて、もう少し厳密に、マタイの福音書 6 章全体から、この宝というものを考えてみたいと思います。イエス様は、マタイ 6：1 で「**人に見せるために人前で善行をしないように気をつけなさい。そうでないと、天におられるあなたがたの父から報いを受けられません**」と言われました。そして、人前で「施し」や「祈り」をするのではなく、隠れたところで「施し」や「祈り」をなささい、またやつれた顔や暗い顔で「断食」をするのではなく、隠れたところで「断食」をなささいと言われました。人前で「良い行い」をする時は、人から報いを受け、神様からの報いを受けられない、隠れたところで「良い行い」をする時にだけ、神様からの報いが受けられると教えられました。

そのような流れの中で、イエス様は「地上に宝を蓄えるのはやめなさい」「天に宝を蓄えなさい」と言われるのです。その意味で、「地上に宝を蓄える」というのは、人からの報いや評価を拠り所として生きる生き方です。そして「天に宝を蓄える」というのは、神様からの報いや評価を拠り所として生きる生き方です。

イエス様はここで、人からの報いや評価を拠り所として生きる生き方の危うさを教えているのだと思います。人からの報いや評価は、決して確かなものではありません。傷がついたり、なくなったりするものです。しかし神様からの報いや評価は、確かなものです。決して傷がついたり、なくなったりするものではありません。また私たちが死んだ後にも続く永遠のものです。

イエス様は 21 節で、「あなたの宝のあるところ、そこにあなたの心もあるのです」と言われました。イエス様は、「天に宝を蓄えなさい」と言われました。そして、私たちの心を「天」に向けさせようとされるのです。使徒パウロは、「**私たちの国籍は天にあります**」(ピリピ 3:20)と言いました。イエス様を信じる人は、死後に天に迎えられます。イエス様を信じる人は、死んで終わりではありません。死後に、神様とイエス様がおられる天に迎えられ、永遠のいのちを生きるのです。イエス様は、イエス様を信じる人に、「天」を見上げて、地上の生涯を歩むことを求めておられるのです。「地上」のことばかり、人からの報いや評価ばかりを求めて生きるのではなく、「天」を見上げて、神様からの報いや評価を求めて生きることを求めておられるのです。

神様は、「隠れたところにおられ」「隠れたところで見えておられる」方です。人目につかないところで「良い行い」をする生き方、神様だけは見ていてくださると信じて「良い行い」をする生き方、それこそが、イエス様を信じる人の生き方であり、「天に宝を蓄える」生き方なのです。

2. 目を健やかに

イエス様は、22-23 節でこう言われます。「**からだの明かりは目です。ですから、あなたの目が健やかなら全身が明るくなりますが、目が悪ければ全身が暗くなります。ですから、もしあなたの中に光が闇なら、その闇はどれほどでしょうか**」。ここでもイエス様は、「天」を見上げることを教えておられます。私たちの「目」がどこに向けられているかが大切です。私たちの「目」

が「地上」に向けられている時、私たちの目は盲目とあり、暗闇に包まれます。私たちの生活全体が闇に包まれます。しかし私たちの「目」が「天」に向けられている時、「天」の光が私たちに差し込み、私たちは光に包まれ、私たちの生活が明るく照らされます。

私たちの「目」の健全さは、私たちの「目」がどこに向けられているかによるのです。私たちの「目」が「天」に向けられていれば、光を取り込み、私たちの生活全体を明るく照らしますが、私たちの「目」が「地上」に向けられていれば、光を失い、私たちの生活全体が闇に包まれるのです。

イエス様を信じる人は、いつも「天」を見上げ、「天」に心を向けなければなりません。それこそ、私たちの生活全体を明るく照らす生き方なのです。

3. 神と富、どちらを選ぶか

24 節を見てみましょう。「**だれも二人の主人に仕えることはできません。一方を憎んで他方を愛することになるか、一方を重んじて他方を軽んじることになります。あなたがたは神と富とに仕えることはできません**」。イエス様はここで、イエス様を信じる人は「神様」と「富」の両方に同時に仕えることはできないと教えています。ここで「富」は、神様と同列に置かれています。

「富」つまり「お金」は、私たち人間の心を強烈に支配します。お金は、神様のライバルとなり得るほど、私たち人間の心を魅了するのです。お金さえあれば、人は幸せになれる、お金が私の人生を保証してくれる、そのようにお金は、神様の王座に君臨して、私たち人間を支配しようとするのです。

なぜ私たちは、神様とお金の両方に同時に仕えることができないのでしょうか。それは、一方を憎んで他方を愛することになるか、一方を重んじて他方を軽んじるようになるからです。つまり同時に、両方を愛し、両方を重んじることが不可能だからです。神様とお金の両方に同時に仕えている人は、必ずお金を愛し、お金を重んじるようになります。そして必ず神様を憎み、神様を軽んじるようになります。神様とお金の両方に同時に仕えている人は、お金を憎み、お金を軽んじるようには決してならないのです。必ず神様のほうを憎み、神様を軽んじるようになるのです。だからイエス様はここで、神様だけに仕えることを暗に求めているのです。

パウロは、Ⅰテモテ 6：9-10 でこう言っています。「**金持ちになりたがる人たちは、誘惑と異教、また人を滅びと破滅に沈める、愚かで有害な多くの欲望に陥ります。金銭を愛することが、あらゆる悪の根だからです。ある人たちは金銭を追い求めたために、信仰から迷い出て、多くの苦痛で自分を刺し貫きました**」。パウロはここで、「金銭を愛することがあらゆる悪の根」であると言っています。お金は、私たちを神様から引き離し、滅びと破滅へと私たちを引きずり込みます。イエス様を裏切った弟子、「イスカリオテのユダ」はその典型的な例です。彼は、イエス様に仕える弟子でした。しかし彼は、同時に金銭にも仕えたのです。彼は、銀貨三十枚で、イエス様をユダヤ人の宗教指導者たちに売り渡したのです。ユダは最初、お金に目が眩んで軽い気持ちでイエス様を売り渡しました。しかしイエス様が十字架で殺されることに

なると、彼は後悔し、銀貨三十枚を返しますが、彼は結局、首をつって自殺するのです。まさに彼の人生は、滅びと破滅でした。神様とお金の両方に同時に仕える人は、必ずお金の力に引き寄せられ、滅びと破滅へと向かうのです。

私たちは、お金を持てはいけないではありません。イエス様が警告しているのは、お金に「仕えること」です。つまりお金の「奴隷」となり、お金を自分の「主人」とすることです。神様よりもお金を大事にすることであり、お金が自分の行動基準になることです。本来、神様が占める王座に、お金を置くことです。お金こそ、私を守り、幸せにするかのように考えることです。

お金は、私たちが「仕えるもの」ではありません。お金は、私たちが「仕えるもの」ではなく、「使うもの」です。私たちは、お金に「支配」されるのではなく、「管理」しなくてはなりません。私たちが「仕えるべき」方は、神様だけです。

私たちは、「神様も」「お金も」という生き方ではなく、「神様か」「お金か」のどちらかを選ばなければなりません。私たちは、同時に二人の主人に仕えることはできません。私たちは、一人の主人を選ばなければならないのです。イエス様は私たちに、神様だけに仕えることを求めておられます。

おわりに

今日の聖書箇所ではイエス様は、私たちに「二者択一」を求めておられます。一つは、「地上に宝を蓄える」生き方か、それとも「天に宝を蓄える」生き方か、です。イエス様は私たちに、「天に宝を蓄える」生き方を求めておられます。「地上に宝を蓄える」生き方ははかなく、「天に宝を蓄える」生き方こそ、確かに永遠のものだからです。私たちは、「天」を見上げ、「天」に心を向けて、隠れたところで見ておられる神様からの報いを期待して、「良い行い」に励むことが求められているのです。そのような生き方こそ、光に包まれ、私たちの生活全体を明るく照らす生き方だからです。

もう一つは、「神と富の両方に仕える」生き方か、それとも「神だけに仕える」生き方か、です。神と富の両方に同時に仕えることは不可能です。必ず神を憎み、神を軽んじるようになるからです。その道は、滅びと破滅です。私たちは、一人の主人しか持つことはできないのです。イエス様は私たちに、「神様だけに仕える」ことを求めておられます。

イエス様は私たちに、「二者択一」を求めておられます。私たちは、覚悟を決めて、どちらかを選ばなければなりません。最後に、パウロの言葉を聞きましょう。「**今の世で富んでいる人たちに命じなさい。高慢にならず、頼りにならない富にではなく、むしろ、私たちにすべての物を豊かに与えて楽しませてくださる神に望みを置き、善を行い、立派な行いに富み、惜しみなく施し、喜んで分け与え、来るべき世において立派な土台となるものを自分自身のために蓄え、まことのいのちを得るように命じなさい**」(Ⅰテモテ 6:17-19)。

天におられる私たちの父なる神様。

私たちの「心」や「目」は、「地上」のことに捕らわれ、「富」に捕らわれています。イエス様は私たちに、「天」を開き、「神様」との和解の道を、十字架と復活によって与えてくださいました。イエス様を神の子キリストと信じる私たちは、「天」を見上げ、心を「天」に向けることが求められています。また「神様」あなただけにお仕えすることが求められています。あなたは、私たちの心を求めておられます。私たちの心が、「地上」ではなく「天」に、また「富」ではなく「神」に向けられていきますように。人からの報いや評価、富に惑わされることなく、ただ「天」とあなたに真っ直ぐに心に向けられますように。

この祈りを私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。